

委員会活動報告

アーバントリップ実行委員会

第73回アーバントリップ見学記

古くて新しい素材： レンガ、テラコッタをグルメする



加藤将己

■いつもの楽しい興味深い見学会です。今回のテーマは「古くて新しい素材：レンガ、テラコッタをグルメする」

なんとも食してみたいトリップとなりそうな予感です。このトリップの案内の写真が素晴らしく、昨今はやりの工業製品にない石を思わせる深みのあるタイルの質感が思わず参加したいと申し込んだのでした。

見学日は2013年11月23日(祝・土)。このグルメのメニューは

(1) 国際仏教学大学院大学：スクラッチが強調されたレンガタイル。

設計 横文彦氏(楨総合計画事務所)、

(2) 文京区立森鷗外記念館：グレー色のレンガのサンダー研磨。

設計 陶器二三雄氏(陶器二三雄建築研究所主宰)、

(3) 東洋文庫：テラコッタの乾式工法。設計 三菱地所設計

いずれも文京区にあり、今回は各自の移動による見学会となった。

(1) 国際仏教学大学院大学：

スマートフォンのmapをたよりにまず訪れた最初の国際仏教学大学院大学。この敷地は江戸幕府の第15代将軍徳川慶喜の終焉の地として、大政奉還後の旧第六天町に移り住み、没するまでここで暮らした



国際仏教学大学院大学外観

ゆかりの地である。その後は大蔵省の官舎として利用された跡地でもある。この敷地の主の大蔵省が紅葉真っ盛りの黄金色の姿で我々を迎えてくれた。外壁は赤、淡赤、灰赤の三色をミックスさせ、一枚一枚職人さんの手によりスクラッチを強調したクレイマイスター製法というせつ器質無釉タイルである。この3色を3:3:1の割合でランダムに張り、コンクリート打ち放しの壁との対比を味わい深いものとしている。これは「風の丘葬祭場」、「福島県男女共生センター」の実績をふまえて決定された。起伏に富んだ敷地の特性を生かし校舎全体は5つのブロックで計画され、春日講堂と1号館、2号館は70本の竹林に囲まれたガラス張りの渡り廊下で結ばれる。太陽の方位と高度の変化により反射される姿が意図されているという。

(2) 文京区立森鷗外記念館：

鷗外生誕150周年に合わせて建て替えが企画された公募型プロポーザルによる。文京区の不忍通りから折れ、団子坂を上がった町中に、シンプルにして存在感のあるマッシブな鷗外記念館が現れる。当時2階から東京湾が見えたという鷗外の住居『観潮楼』の跡地に計画された。団子坂、東側の葎下通りからも出入り出来、通り抜けも出来る。グレー系のせつ器質タイルを施工後目地共サンダー掛けし、内部の色・窯変が現れ砂岩のような独自の質感をもつ、むしろ柔らかさを持った壁であり、室内のコンクリートの打ち放しの固い壁との対比が素晴らしい。氏がイタリーで研鑽をつみ習得した、漆喰を削ってレンガを見せると



森鷗外記念館 1 外観



森鷗外記念館 2 外装
「国代耐火工業所」パンフレットからの転載

いう建築の修復技法から、このこだわりの外壁は生まれた。背の高い大きな両開きのスライドドアを入ると正面にはトップライトからの光を受けた斜めの壁が来訪者を迎える。白井晟一氏曰く「対峙できるような壁」である。足元の床面はスリット状となっており、その光は地階へと導かれる。「光や影が壁の表情に奥行きを与えてくれて、現代建築にない手垢みたいなものを表現したかった。」と建築家陶器氏の弁。「なんらかの形で鷗外の人と作品とを照応する記念館として大振りな構えを避けて低く簡素な表現の建物にしたいと考えたんです」と。施工精度と合わせて深みのある完成度の高い建築となっている。背の高いコンクリートの大きな壁にはさまれた通路、そこにもれる光の扱いにダニエル・リベスキンドのドイツのユダヤ美術館を彷彿させるものがある。

(3) 東洋文庫：



東洋文庫 2F 書庫

アジアの歴史と文化に関する専門図書館であり研究施設である。創設は大正6年であり、以来90年増築、立て替えを繰り返してきた。東洋学の普及に力を入れたいとのクライアントの意向を受けミュージアム、カフェを取り入れた知の集積としての建築の表現を意図している。外壁は高さ990のサイズのテラコッタをランダムにならべ本が密に並んでいるイメージを表現。テラコッタは躯体から浮かして取り付け、目地はオープンカットとして通気工法のダブルスキンとして安定した温度管理の求められる書庫の急激な温度変化を抑制している。内外装に使われた石材は書庫の書物になぞらえ西はトルコから東是北京までの東洋産としている。圧巻は2階の展示2で2層分の吹き抜けの中に三方書架に囲まれている。見せる書庫として本に囲まれた展示室。展示ケースも書架に組み込まれている。書庫の行き来を使用する階段はガラス張りの開放的な空間で階段は踊り場から持ち出すトラスの階段で柱のない扱いとなっている。

末尾ながらこの有意義なJIAアーバントリップを企画、お世話いただいた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。